

の一環であることを明らかにする。」というテーマで、講義と座談を重ねてきました。かつて「教学派」「儀式派」という言い方がありました。現在は教学も儀式も偏らないで両方ともきちんと学ぶという姿勢がみられます。私もそのことを大切にしてきたつもりでしたが、実際には自分の中で教学は教学、儀式は儀式のまま、両者がひとつに繋がっていかないもどかしさを感じ、また、それは教学派、儀式派というあり方と本質的には何も変わらないということに思い至りました。

そういう中、楠先生の講義は「我々が勤める儀式には慚愧心と請仏の心が決定的に欠けている」という厳しい指摘から始まりました。これほど大切なことが問題にならないまま、今まで儀式を行っていたことに、部会員全員が大きな衝撃を受け、このことが2年半を通して課題となってきたように思います。

儀式の意義をたずね、『法事讃』、五念門、五正行と学んできましたが、それらはみな本願の行信、「本願を信じ、念仏もうす」ことを勧めるものであります。そして、そのことをいただいてこられた先達によって

した。また、そこでは繰り返し、法要儀式の根底には懺悔と願生浄土がなければならぬというところが確かめられました。ご門徒の皆さんに儀式を通して何を伝えられるのか、法要は現代の人にとって意味のわからない退屈なものになってきているのではないかと、葬儀等が簡略化されてきている中、私たちが勤める儀式はこのままでいいのだろうか、などという私たちがもっていた当初の問題意識は大きく方向を転換せしめられ、真に問われるべきは私自身が儀式にのぞむ姿勢であったということが強く意識されるようになりました。

また、それは私の中に本当に仏を敬う心があるのかを問うものであり、「人の目は気になるけれど、仏の眼は気にならない」、「仏前」であるという自明なことがらです。見失っていた自分の姿を問うものでもありません。私たちが第一義的に問題とすべきは、教化「教人信」の手段として、聞かせる、見せることを意識した儀式ではなく、私の「自信」が問われる儀式なのだと。お勤めの経文は仏の説法であります。参詣者が分かる分からないということの問題にするよ



専門部会の終わりに(主査所感)

【教法と儀式】

主査 金光朋充(厚真町・正樂寺)

当部会は、「教法を学び、儀式の意義を確かめ、日常の勤行や法要儀式が自信教人信

いるという。儀式の執行者として当然のことが疎かになっていくという事でした。『和語燈録』には、法然上人が毎日『仏説阿彌陀経』を三巻、それぞれ唐訳、呉訳、訓読みで読まれていたことが記されていますが、訳を違えて読むことで内容をより深く味わおうとされたことが思われます。また、「住職は広く知らなくとも『正信偈』と三帖の『和讃』について、いつでもつねに法話ができるようになれば十分である」という住田智見師の言葉をしっかりと受けとめなければなりません。

懺悔も願生浄土も仏徳讃嘆もはつきりしない私に、念仏を勧め、信心を勧めて下さるのが、伝統されてきた儀式の莊嚴、声明、作法であり、法要儀式の場であり、そこに集う僧伽としてのご門徒であるのでしょうか。報恩講などの儀式に臨む時、このお香が、お燈明が、仏華が、声明の響きが、この場に集う人々が、実は私に念仏の信を勧めて下さっているのだろうか、ふと思われる事があります。今、お内陣、お内仏の莊嚴すべてが実は私のためであったと心から思える者でありたいと感じています。

りまず、私自身が教え導かれる教言として聞いているのか。伝統されてきた形の中で念仏と信心が勧められているのは、何よりも私なのだということです。

部会の回を重ねる度に痛感したことは日頃の勉強不足であり、それは儀式の成り立ちや莊嚴についてのみならず、お勤めしている内容、仏の教言がしっかり理解できて

具体的に表現されてきたものが儀式であり、曇鸞大師の「帰命は必ずこれ礼拝なり」(『真宗聖典』168頁)ということが儀式の基本にあるのだということを学んできま

